

達磨多羅禪經說通考疏について

— 白隠禪の一側面 —

木村 静雄

本疏の序説によれば、東嶺が始めて達磨多羅禪經を手にしたのは寶曆十二年四十二歳の秋であり、始めて之を講じたのは安永三年五十四歳甲州清泉寺に於いてであつた。爾後度々提講して、年譜には天明六年六十六歳大阪國恩寺で講じたのを最後としている。其間安永五年には火災に遭うて書稿を焼失し乍ら、「重ねて大誓を奮起し考證倦むことを忘れ」經典祖録を博引傍證して本疏を完成したのは天明元年六十一歳の六月二十八日信州玉林寺に於いてであつた。そして天明四年には六冊本として玉林寺から上梓された。その量に於いては禪師最大の著述であり、圓熟期の勞作である。

東嶺は言うまでもなく本經を禪宗初祖菩提達磨大師の

所説と信じてその研究に心血を注いだのであるが、その動機は「設非シム大師之説、若不下具ニ大師眼上、底人上爭敢論説」という白隠の示唆にもよるのであるが、その歴史的考證の論據としたのは、専ら宋の契嵩の傳法正宗論（傳法正宗記卷第十一）であつた。契嵩は西天二十八祖説を擁護するために、梁の僧祐の出三藏記集を依用して、そこに擧げられる達磨多羅が菩提達磨の法俗合名であるとし、達磨多羅禪經を菩提達磨所説とするのである。そして本經に説かれる小乘的觀行が實は大小乘に通ずるものであり、達磨がその渡來以前に方便として先づ本經を流布せしめたものであることを力説するのである。然しながら、中國の禪者に於いても本經を菩提達磨所説とする者は契嵩以外には見當らないし、現代の佛教學佛敎史學に於いても問題にはならない所である。東嶺が契嵩に従つ

て本經を初祖達磨の名に於いて權威づけたことは、その限りに於いて明かに史實に反するものと言わなければならない。しかし、東嶺が本經を取上げた動機は達磨の名にあるとしても、その研究内容の禪學的意義は全く別のものである。即ち、東嶺がその深い禪經驗を通して此の古い禪經に新しい意義と使命を與え、白隱禪の組織體系の中に積極的に之を攝取しようとした眞摯な努力は高く評價されなければならないのである。

二

達磨多羅禪經は達磨多羅と佛大先に依つて編集され、東晋の佛陀跋陀羅によつて譯されたものである。大安般守意經、禪秘要法經、修行道地經、治禪病秘要經、五門禪經要用法、坐禪三昧法門經、禪法要解經等と共に、初期の中國佛教に三學の一としての禪定と觀法を普及したといゆる禪經の一である。

その内容は、安那般那即ち數息觀、不淨觀、地水火風空識の六大の空を觀する界觀、四無量心、五陰六入、十二因緣等の教理を觀する坐禪法を説くものであるが、之を何の疑いもなく達磨大師の教説と信じた東嶺は、「涅槃經を以つて經の本と爲し、華嚴・法華・楞伽を以つて義の證誠と爲し、阿含等の諸經を以つて事の因緣の根基と

爲し」(序説)豊富な佛祖の機縁を引例して證論とし、本經一篇の内容を完全に自家藥籠中のものとした。そこには固より歴史の飛躍と思想の混同があるが、その佛教學から神道に至る廣い教學的知識の基盤と、彼自身の透過し來つた深い禪經驗の觀點から、彼独自の、白隱系看話禪の一テクニクとしての禪經を作り出したとも言ひ得るのである。

今こゝにその大要を記す繁は避けなければならないが、各分章の名目と、東嶺の見解を示す總評の一節を左に引用してその傾向を窺うことにしたい。

(第一) 修行方便道 安那般那念 退分

見性成佛單傳心印、卽是曰修行勝道。修禪觀法普盡性源、是曰修行方便道。(上之一・一ノ二表)

第一安那退分者、是明下習定進道不_レ解方便、多有_二退隨_一(同一ノ二表)

(第二) 修行勝道 退分

明_下初心見道如_二電光拂_一不_レ加_二精進_一退過日深(同一ノ一表)

(第三) 修行方便道 安般念 住分

明_下修得禪定誇_レ功負_レ氣不_レ求_二正見_一不_レ參_二明師_一守_二獨善寂_一枉錯_二多生_一(上之二・三ノ一表)

(第四) 修行勝道 住分

明下雖見地分明不疑言句是爲大病之義 (同四ノ一表)

(第五) 修行方便道 安般念 升進分

明下再修圓通命根斷工夫盡禪定底斷妄想根益進勝道升進重關 (同五ノ一表)

(第六) 修行勝道 升進分

明下悟後請益透關穿鑿臨濟錄所謂穿鑿作一柱大樹者是也 (同六ノ一表)

(第七) 修行方便道 安般念 決定分

明了了徹底出沒無礙隱顯自在是爲決定義 (上之三・七ノ一表)

(第八) 修行勝道 決定分

明下見性明了如見掌上、差別大小法門悉達分其鎚銖恰如杲日耀天明鏡當臺 (同八ノ一表)

(第九) 修行方便道 不淨觀 退分

欲斷一切煩惱、以不淨觀最爲第一……見性菩薩亦復如是、法身慧燈雖有明照、三毒邪氣未

能全除、若不觀達對治方便大好法身不能全命…… (下之一・九ノ三表)

(第十) 修行方便道 不淨觀 住分

偏修不淨觀者、但厭患心無慧解故、悉成窠

窟不得自在、於自受用尙不自在、何於化他轉無碍輪…… (同・十ノ一表)

(第十一) 修行方便道 不淨觀 升進分

明下於不淨觀上兼修實相之觀、究取捨隱顯淨不淨自在三昧之地 (同・十一ノ一表)

(第十二) 修行方便道 不淨觀 決定分

明下初以三十六物觀不淨義、次依一乘實相觀純淨義、二觀成熟二諦圓融斷煩惱障除所知障、彼此了徹取捨任意、以之受用脫洒自在、以之度脫應變無碍、是名決定分。菩薩若不到此決定之位、何以入佛界入魔界、作順方便作逆方便任緣度脫六道四生…… (同・十二ノ一表)

(第十三) 修行觀界分

最有全提之一著子……明下界者總名地水火風空識之六、別指六十二界等、安般勝道及不淨觀純熟後、以此六大觀重加精鍊便到自利利他大自在大解脫之場

大凡勝道四分雖有階漸只是見性一實相耳。安般不淨之八分者雖有前後同約方便、就中安般念者止之方便、不淨觀者觀之方便、此界觀者即全提之要路子。 (下之二・十三ノ一表)

(第十四) 修行四無量分

入_レ菩薩行_ニ之要路也。……明_レ菩薩能學_ニ行願_ニ調_レ根_レ揀_レ器位齊_ニ佛祖_ニ可_レ起_ニ廣大心無碍用無畏自在之德_一、菩薩設得_ニ了了見性_ニ差別向上共到_ニ究竟_ニ若不_レ起_ニ此四無量心_一(慈悲喜捨_一依_レ舊只斯二乘小果。(同・十四ノ一表)

(第十五) 修行觀陰分

重論_ニ禪定之密_一(同・十五ノ一表)

(第十六) 修行觀入分

重明_ニ戒行之妙_一(下之三・十六ノ一表)

(第十七) 修行觀十二因緣分

明_ニ普門圓應之義_一(同・十七ノ一表)

右によつて大體の傾向を見得るのであるが、これらの觀法の中、實際に白隱系の禪に攝取され、大きな影響を與えたものは安那般那數息觀であらう。

三

安那般那を説く經の本文は、方便道と勝道とに分けられ、各々に退分、住分、升進分、決定分の四分があり、計八節から成つて殆んど全體の半ばを占めている。方便道は主として數息の方法と過程を微細に分析して、退・住の兩過と、升進・決定の向上門を示し、勝道は方便に

よつて生ずる勝境界の段階を四分して説くのであるが、東嶺の評釋は前節にその一端を見る如く、直ちに看話禪の見地から之を理解せんとするのである。

即ち、勝道とは見性成佛單傳心印の達磨禪の端的であり、方便道は數息の修禪觀法によつて普ねく性源を盡すの道である。言わば、前者は本覺門の立場であり、後者は始覺門の立場であるとも言ひ得るであらう。

勝道約_ニ正悟_一、方便道約_ニ助道_一。又有_ニ前後異_一、初心修_ニ助道_一入_ニ正悟心_一、是曰_ニ前方便_一。已得_ニ正悟_一再修_ニ助道分_一、是曰_ニ後方便_一。(一ノ二表)

以_ニ對治門_ニ而修曰_ニ方便禪_一、依_ニ知見力_ニ而住曰_ニ勝道禪_一。以_ニ觀照力_ニ而證曰_ニ方便智_一、悟_ニ本圓性_ニ而契爲_ニ勝道智_一。(一ノ五表)

そして前者の如き解釋を付與して始めて本經は菩提達磨の親説たり得るのであり、同時に後者の如き方便道としての數息觀が白隱系看話禪の重要な助道として採用され得る事となるのである。

大凡修_ニ禪定_一者、若不_レ依_ニ此六妙門十六特勝妙義_一修至_ニ驢年_ニ難_レ盡_ニ淵底_一。此是大乘小乘古今通用入定之門也。(一ノ十四裏)

又、この數息觀は、さきに後方便と言つていられるように悟時の定力を養うためにも最も重視せられるのである。

此安般念升進分者、見性得悟之人再修禪定、令道根堅固^一、令知見廣大^二、令化他自在^三、令方便無碍^四。
(上之二・五ノ十七裏)

四

思うに、初期の中國佛教に於いては、達磨多羅禪經に説かれるような種々の觀法を内容とする坐禪法が先づ普及され、その流れは菩提達摩を初祖とする禪宗の基盤となり、更に天臺の止觀となつて大成された。しかし達摩禪の基本的性格は、坐禪觀法よりは見性開悟を目的とするために、むしろ表面に於いては坐禪と禪觀を否定する任運無作無心の禪となり、定慧不二と言いつゝ慧に定を攝する六祖慧能系の頓悟禪が主流となつた。そして、更に見聞覺知の日常應縁のはたらきの中に自性を見んとする馬祖・百丈・南泉・黃檗・臨濟の禪にまで發展した。然しながら、定と慧、止と觀、頓悟と漸修は禪の両面であつて、一方の弊が自覺された時には他方が強調され、一面が主張される時は他の一面がその裏に隠されるのである。やがて公案工夫を方法とし、大疑大悟の過程をとる宋代の看話禪が成立したのは必然であつた。

東嶺の師白隱は、最も見性開悟を重んじ、彼自身大悟小悟その數を知らずと言われるが、看話工夫と正師の提

擲を強調する反面、或る種の禪觀による禪定力の涵養をすゝめ(夜船閑話・壁生草)^(一)、また達磨多羅禪經を講じたようである。

東嶺が達磨多羅禪經によつて、數息觀、不淨觀などの觀法を大きく取上げ、特に何人にも親しみ易い數息觀を、悟前悟後に通じて道根と定力を培う無上の助道方便としたことは、白隱系の禪を大衆化し安定化することに大きく貢獻したものと考えられる。

註一

云ふことなけれ、しばらく禪觀を抛下せんと。佛の言はく、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿舍に酥を用ふるの法あり。心の勞疲を救ふこと尤妙なり。……腹の空なる時に當て即ち靜室に入り、端坐默念として出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に到る。百より數へ持ち去て千に到て、此身元然として此心寂然たること虛空と等し。……

時々彼の内觀を潛修するに、纔に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ひず。鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず。從前手脚を挟むこと得ず、齒牙を下すこと得ざる底の難信難透、難解難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して大歡喜を得るもの、大凡六七回、其餘の小悟、怡悅踏舞を忘るゝもの數を知らず。妙喜の謂ゆる大悟十八處、小悟數を知らずと。初めて知る、寔に我を欺かざることを。(白隱全集第五卷)

註二

内觀與三禪觀一共和並修、清苦可貴。依内觀功二從前多少病惱拂底平癒、清閑瀟洒、自在三岩瀧一日遙勝。(白隱全集第一卷・壁生草卷中之下)